[File: rokko15kai 2021/08/07]　第二回

ご無沙汰しました。山本です。

先に、サービス付き高齢者向け住宅入居直後の生活について記しましたが、引き続き今回もその後について記してみます。



（居室の窓の外は色とりどりの屋根）

* 2021年7月30日、待ちに待った？コロナ・ワクチン接種、２回目の日、午後2時、8階レストランのテーブルを片づけた広いスペースに3列に椅子が並べられ、30人ほどが着席して待っていた。今日は、昨日に引き続き当施設の3分の１の入居者が接種を受ける。時間ぴったりに、当施設の看護師2人の先導で、提携先病院の医師が、注射機材を準備万端整えたワゴンを押す病院所属の看護師２人を従えて入場した。

たまたまだが、妻が一番始めに、次に自分が接種を受ける席に着くよう決まっていた。

入居者全員が予め施設に提出していた問診票を施設看護師が医師に渡すと、医師は一人一人の問診票を確認し体調などを質問して問題ないことを確認してから書類にサインする。施設看護師が年寄りの袖を捲くって腕を確保すると、病院看護師の一人が腕を消毒し、もう一人が予め用意されていた注射器で接種注射する。書毒看護師が注射後にバンソコウを貼って終了。一人当たり１分～2分ほど。

その後、施設看護師の一人が、一人一人の事後待機時間20～30分の時刻を紙に書いて目の前の椅子に貼り付けていく。普段から元気な人は20分間、その他は30分間の待機時間をとっている。自分たち夫婦は、妻の体調からして30分はやむを得なかった。

接種後2日間、二人とも注射跡の痛みはあったものの副反応といえるものは何もなかった。その他の入居者も特別な副反応はなく、無事終わったようだ。やれやれ。

* 施設に居て便利だと思うこと。選挙の期日前投票を施設で行うことが出来る。

8月には横浜市長選挙が行われる。投票所まで出かけなくても施設で投票できる。年寄りにとってはありがたい便利な方法である。暑くても、雨の日でも、問題なーし！

今回の市長選はIR（カジノを含む統合型リゾート）誘致が論戦の的。

横浜市は370万人以上が住み、全国市区町村別人口で日本一の大政令都市。将来的な少子高齢化や税収減など財政的な課題も多く、その解決策の1つとして横浜市民はIRを選択するのか否か。立候補者の2人がIR推進賛成派、他の6人は反対派。賛成派2人の得票数が反対派６人の得票数を上回って過半数を取ることが出来るか否かを見極めようとする機会でもある。更に面白いことに、政権としてIRを推進する立場にある現首相が、反対派で立候補している自民党議員を応援していることである。その思惑は？　政見放送をじっくり聴いてみたいものだ。

誰が市長に選ばれるにせよ、「投票率が低い」という結果だけは見たくない。自分はこの施設の投票所で反対派の一人を投票する。いずれにせよ面白い選挙ではある。

* 施設に入ってからもうすぐ１年になる。何だか年取ってしまったなあと感じる。普段、「80を過ぎた年寄り」と自分で思ったこともなかったのだが、ここに来てから、当たり前のように年寄りの中で生活し、当たり前のように年寄りと年寄りを世話する側との対局の中で過ごしているからであろうか。これではアカン、ジッとしててはアカン、何でもいいから自から動くようにせなアカン。掃除、洗濯、買い物、車の運転、パソコン、料理。そして、トイレ掃除・・これは勿論「えらいねえー」とよく言われる。えらいもくそもアラヘンネン、人に頼めば対価を請求されるから・・これが“サ高住のサービス”である・・だから自分でやる。自分でやれるネン。何処かで受けたスパルタ教育を決して自慢げに語ったりはしない。
* 施設利用者で唯ひとり、施設の駐車場使用契約をしている。その理由は、妻を病院へ連れて行くのに必要だから。このために、軽自動車ではあるが安全装置をフル装備付きにした。これは自慢ではなく、はっきりと公言することにしている。さもないとなかなか年寄りに運転させてもらえない。免許返上してタクシーを使う方がいいんじゃない？経済的だし、と・・よく言われる。それでも尚「いつでも、使いたいときに使えるし、便利だし、必要だから・・」と、いつまで言い続けられるかなあ？！

コロナ禍中、ミサに与れなくても妻のためにご聖体だけをいただきに教会へ気軽に車で出かけ、その帰り道、近くのコンビニやドラッグストアに立ち寄って、必需品を買って帰る。いやー、やっぱり便利だ。

* 妻を車で病院へ連れて行くのを止めるときが来た。外来で診てもらう日、少なくとも2ケ月に一度は、朝6時起き、急いで食事し、７時半には車で出発し、8時には病院で受付を済ませ、検査結果が出るまでに1時間掛かるという血液検査を受け、X線またはCTを撮影し、心電図を撮る、その後、長～い待ち時間を待って3科もの診察を受けて廻る。全ての診察が終わるのは昼12時を過ぎている。それから更に、妻に代って支払いを済ませ、処方薬を病院外の薬局へ貰いに行って、戻ってくる。ずーっと朝から車椅子に座ったままの妻にとって、どれほど気力・体力を消耗する大仕事であることか。もうこれ以上続けるのは無理だと感じた日、在宅往診医療に切り替える決意をした。

在宅医療に携わるのは大体が個人医である。個人医がどこまで広い領域まで診ることができるかが問われる。これまで長年にわたって診てもらってきた医療センターの紹介で、ただ１点を除き、ほとんどを診てもらえる地域医療に携わる医師が決まった。その１点とは、特異遺伝子ALKに対する抗がん剤の処方である。医師の監視下でのみ投与可能な薬を処方してもらうためには、今までどおり医療センターヘ出向くしかない。それでいい。また新たな挑戦が始まる。

* コロナ禍にあって、この施設でも家族との面会は原則禁止になっている。どうしても家族と会いたければ外へ出かけて行けば会える。

しかし、宗神父は如何されているだろうか？外出できるような状態ではないに違いない。

今年、５月、復活祭の頃、カトリック新聞で、宗神父を含む２人のイエズス会日本人神父が、叙階の金祝を迎えられたという記事を読んだ。

コロナ禍で病院での見舞いは原則禁止であり、宗神父世話役のスペイン人神父だけがキーパーソンとして入館が許され、時々、必需品や手紙、本などを届けておられるようだ。その神父の発信メールに、金祝の記念として“御絵”がイエズス会総長から贈られたことが記されていたと・・その贈り物を、どんな思いで宗神父は受け取られたであろうか。

* イエズス会司祭ヘルマン・ホイヴェルス神父が遺された言葉『最上のわざ』を、“フムフム、なるほどなるほど・・”と他人ごとのように読んでいた若き日は過ぎ去り、年取った今、心静かに師の言葉を噛みしめようとしている・・真剣に、神妙に・・。

学生時代に出会ったホイヴェルス老神父は、いつも穏やかにゆっくりと静かに学生達に話しかけてくれたことを思い浮かべながら。

今回はこの辺でしばしの休憩を

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



［居室の本箱上。左はサンテイアゴ・デ・コンポステラのヤコブ。右は十字架下の母マリア］